

◆佳作◆

非明示的な目的語の日英比較（論文要旨）

人文学部人文コミュニケーション学科 3年

藤田 歩

英語の伝統文法では、目的語が文中に出現するか否かによって、自動詞と他動詞を定義している。しかし、英語を観察してみると、Bill ate. (ビルは何か食べる物を食べた) や Tom washed. (トムは自分自身を洗った) のように、非明示的な目的語をもつ他動詞と考える自動詞もみられる。そして、非明示的な目的語が意味する内容の解釈は多岐にわたる。これに対し、日本語の他動詞で目的語が非明示化すると、その目的語が意味する内容の解釈は、文脈や発話状況に依存する。

以上のように、英語にも日本語にも、意味的に何らかの要素を補って理解しているが、実際は何も発話されていないという動詞がある。このような動詞は、他にどのようなものがあるのだろうか？

そこで、本論文では、日本語と英語における非明示的な目的語をもつ動詞について比較する。2章では、自動詞と他動詞の特徴について述べる。3章では、非明示的な目的語をもつ英語動詞についての先行研究を紹介する。4章では、3章の内容をもとに、日本語の観察をおこなう。5章では、4章の内容に考察を加え、今後の課題を述べる。